心つなぐリモート面会

心元気、フレイル解消！

◆キーワード
1 リモート面会
2 フレイル解消
3 ズームアプリ

（神奈川県・鎌倉市）

ふりがな
種別・施設名
認知症対応型共同生活介護（にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご）・花物語（はなものがたり）かまくら

共同研究者：花物語かまくら　磯田理絵・松尾弘子

ふりがな
職種・発表者：施設長（しせつちょう）・米島庸子（よねしまようこ）

花物語かまくらは鎌倉市の西、海よりのグループホームです。毎月、認知症カフェ（リモート）を開催。	（事業所に関する情報記入欄）２ユニット 18 名のグループホーム、設立は 2018 年 12 月

（取り組んだ課題・はじめに）

毎日、ご家族が来所し、ボランティアの方々も見え玄関のスリッパが足りない事が当たり前でしたが、外出の自粛や面会中止の要請に入居者様の生活全体がフレイル化しました。入居者様に元気を取り戻して頂きたく、安心、安全に面会できる方法を模索しました。

（倫理的配慮）

発表にあたり、入居者様、ご家族様、スタッフに説明を行いアンケート用紙の回収をもって同意として協力の同意を得た。個人情報や秘密保持に関して配慮を行い、所属長の承諾を得た。

（具体的な取り組み）

感染拡大防止の観点から居室でご家族と団らんすることが難しくなり、さらに直接面会が中止となり、形を変えて会いたい気持ちを和らげる取り組みを検討した。

透明パーテーションを使う面会、ガラス戸越しの面会やベランダ越しの面会、そしてリモート面会等、試した。リモート面会が、混乱なく面会方法として最適と考えられた。ご家族に施設でのリモート面会の手順説明書をお送りし、事前予約を頂いた。

リモート面会で笑顔が見られ、ご家族も「思ったより、元気そうでよかった。」と、安心安全に面会できるようになった。アンケートのご協力を頂き、現在の改善点や今後の参考にさせて頂いた。

（活動の成果と評価）

ご家族とスタッフにアンケートを実施する。アンケート結果、ご家族とスタッフの大多数の意見は「リモート面会が入居者様の為になっている。」と回答者全員から 100％の回答となった。「直接対面の面会が、できるようになるまでリモート面会を継続する。」に、85％の回答があった。ご家族のリモート面会についての感想「私はこれからですが、今の時代必要です。」「元気な顔と声が聞けて安心します。ありがとうございます。」「面会の手段があるという安心感は、ありがたく思います。」等の意見が寄せられた。

（今後の課題・考察・まとめ）

不安や心配を少しでも緩和し穏やかに生活を継続して頂くために家からでも施設の別室からでもリモート面会出来る事で心が落ち着き笑顔に繋がった。困難なことがあっても皆で前に一歩でも進むことが大切であることを知る。

（参考・文献など）

神奈川県リモート認知症カフェマニュアル
川口孝泰（2020）　看護研究ミニマム・エセンシャルズ　医学書院

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

九州大谷短期大学
KYUSHU OTANI JUNIOR COLLEGE
福岡県筑後市蔵数 495-1　TEL.0942-53-9900 https://www.kyushuotani.ac.jp/

● 幼児教育学科（幼児教育コース・児童福祉心理コース）
● 専攻科福祉専攻　● 仏教学科
● 表現学科　演劇放送フィールド
● 表現学科　情報司書フィールド
● 福祉学科
【福祉学科で取得できる資格】介護福祉士受験資格 / 社会福祉主事任用資格
レクリエーションインストラクター / こころの介護士資格修了認定
地域生活支援コーディネーター資格修了認定 / 華道脇教授3級

難聴のある利用者ケアを通して
BPSD が軽減した事例

◆キーワード
1 難聴のある利用者
2 関わりの工夫
3 ひもときシート

岐阜県・関市

いりょうほうじん　こうとくかい　　ぐるーぷほーむ　あさひ
医療法人　　香徳会　　グループホーム　あさひ

おおむら　みきよ
職種・発表者：介護福祉士　大村　未来代　　共同研究者：村井　正三、堀部　将之

平成１１年５月開所、平成２３年６月移転増床 ２ユニット　１８名	施設理念：私たちはすべての方に喜んでいただけるヘルスケアを提供します。

（取り組んだ課題・はじめに）

入所後 A 氏は自立度が高く穏やかな生活を送る事が出来ていた。しかし平成 31 年 8 月頃から物の片づけ忘れや、物盗られ妄想が始まり、「盗まれた」「隠された」等時々大きな声で怒るなどの感情のコントロールが出来ず、穏やかな生活が出来なくなってきた。そこで A 氏の中でどのような変化があり、どう対応していくと穏やかな生活を取り戻す事が出来るかを考え実践したところ、A 氏との関わりの中で気づく事が出来た為、取り組んだことを報告する。

（倫理的配慮）

所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。利用者、利用者家族および職員に対して、研究の目的・方法等の説明とともに、研究への協力は自由意思であり、いつでも中止でき協力しない場合でも不利益を被らないことなどを口頭と書面にて説明し同意を得た。

（具体的な取り組み）

令和 2 年 11 月中旬頃、家に帰りたいという思いが出始め、泣く、喚くなど暴力的な言動が強くなった。その背景には何があるのかと考え、「ひもときシート」を活用し A 氏の思いなどに着目した。退職後、先に旅立ってしまった大切な 2 人の家族がいた。コロナ禍前は年 2 回の墓参りと、月 2 回の娘夫婦の面会では穏やかに過ごしていたが、面会制限が厳しくなり孤立、孤独感が要因だと思われた。社会事情から今は墓参りや、娘夫婦との面会が出来ないと説明すると、理解が出来ず、その思いだけが募り苛立ちや悲しみとなり、表情が険しくなっていったようであった。A 氏の会話は一方的で、職員の問い掛けには何度も聞き返すことがあり、繋がらない会話がよりストレスになった。何度も聞き返す姿や声掛けに対して合理的な返答が見られないことが続いた為、筆談でコミュニケーションを図る事にした。すると「わかった」と頷き理解された様子がみられた。このことから補聴器を使用していても聞こえが十分では無いと確信し、普段の様子を家族に伝えると、後日補聴器を新調して頂けた。そして家に帰りたい思いが毎日数回あり、外に出ようとする際には思いに共感、傾聴し職員が交代で行きたい方向に付き添う事にした。何度も繰り返される日々の中、職員の話にも耳を傾けるようになり「コロナという怖い病気が流行していますので、直ぐには家に帰れないです」と伝えると「そうやな」と納得されホームに帰って来るようになった。家族の協力もあり「オンライン面会」を実施すると涙されることもあったが、家に帰りたい思いが治まった。普段も耳の聞こえが良い為、好きなスポーツの話題では、職員と相撲や野球の話を嬉しそうにする姿がみられ、繋がる会話が多くなった。

（活動の成果と評価）

BPSD と思われた行動は補聴器などの不具合の可能性も考えられ、聞こえない事の孤独感や不安感から攻撃的な言動に繋がったとも考えられた。補聴器を新調する事により、周りの声が届き表情と共に理解ができ、コミュニケーションがスムーズに出来る様になった。職員との会話も増え、信頼関係が築け、物盗られ妄想は減った。令和 2 年 8 月長谷川式認知症スケールでは 9 点だったが、同年 11 月は 13 点と上がった。

（今後の課題・考察・まとめ）

認知症ケアは、現在のおかれている状況や状態を理解する事も大切で、使用している機器の不具合だけで BPSD が悪化する事もある。あらゆる可能性を考えてアセスメントしていくことが必要だと考える。そして、その時々の訴えに対して、真摯に向き合い思いを傾聴し、理解する事で認知症であっても人の温もりを感じ、愛情や思いやり、穏やかな感情を取り戻し、徐々に安心した生活を送れるようになると考える。今後も様々な対応を介護者として、どう理解し適切に対応するかを考え行動し、利用者と家族が穏やかで安心した生活を送れる事が、私達介護者の役割だと思われた。

（参考・文献など）

認知症ケア高度化推進事業「ひもときシート」
長谷川式簡易知能評価スケール。

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

いつまでも健やかでいたいね

ふれあいハウス　福祉用具レンタル･販売/住宅改修

〒839-0851 福岡県久留米市御井町 1684-9
九州ホームケアサービス株式会社
TEL. 0942-45-3815 / FAX. 45-3816

「まんてん菜園」で満点の笑顔に!!

～役割が意欲を引き出す～

◆キーワード
1 庭の活用
2 意欲の向上
3 利用者同士の関係性

滋賀県・長浜市

社会福祉法人まんてん　グループホームまんてん塩津

職種・発表者：介護職　西嶌　高志　　共同研究者：グループホームまんてん塩津職員

認知症対応型共同生活介護 平成 17 年 4 月 1 日開所 平成 24 年 6 月増設　2 ユニット　定員 18 名	運営理念：のんびり　ゆったり　ほがらかに。 いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

（取り組んだ課題・はじめに）

グループホームまんてん塩津では、自立支援を理念に掲げ、ご利用者一人一人が自分らしい生活を送れるように、日々のケアを追及している。毎日の生活の中で、ご利用者同士のコミュニケーションが少なく、一日を何となく過ごしておられるのではないかと感じ、なにか共通の話題になる物は無いかと考えた。

そこで、ご利用者の皆様に馴染みがある、庭先の家庭菜園に目を付け、環境や運営方法を見直し、良いコミュニケーションの場となるように取り組んだ。

（倫理的配慮）

事例報告にあたり、ご家族の承諾を得る。

（具体的な取り組み）

1、(1) 以前から、プランターや畑に花を植えたり野菜の栽培をしていたが、古くなった道具や使いにくい道具があったので見直しを行う。軍手は新しい物に交換し、以前から使っていた鍬・鎌は重たい物が多く、手の疲れを軽減するため、軽い鍬・鎌に変更した。

(2) ご利用者と一緒に畑の準備を整えてから、季節ごとに野菜の苗植えをする。ご利用者に苗植えの仕方を尋ねると、土を掘って苗を入れて土を上から被せる等、積極的に作業をされる。

(3) 野菜の収穫まで、水やり・畑周辺の草とりをご利用者と行う。足の不自由なご利用者は、小さな椅子を使用し、座って作業が出来る様にアプローチを行った。

2、1 日を居室で過ごす事が多い方には、昔はどの様に過ごされていたのかを尋ね、個別のアプローチを行った。

「昔は畑の仕事をしてたで！」「キュウリも大根も植えて大変やったけど、楽しかったな～」と笑顔で話される。

その為、まんてん菜園を開始する事を伝えると、「そうなの？昔を思い出すわ～またする時は私も誘ってな～」と前向きな返答をされる。

（活動の成果と評価）

1、(1) R2 年春頃、草とりを開始。初めは 2 名ほど参加。その後、草とりを日課として、ご利用者をお誘いする事で、「私もしてみたいわ」「皆してるから、私もしてみようかな」と徐々に人数が増える。

(2) 5 月頃に畑の準備を整えてから、キュウリ・さつま芋・トマト・南瓜の苗を植えた。ご利用者より、植え方を教えて下さる事もあった。

(3) 夏頃、野菜の収穫を行う。ご利用者同士で「皆で採りに行こう」と笑顔で話される事もあり、生き生きとされている様に感じた。

(4) 秋頃に、さつま芋の収穫を行う。「大きいのが出来たな～」「焼いたらもっと美味しいやろな～」と収穫出来た事に対して感動されている様子が伺えた。

(5) 冬頃に、大根の収穫を行う。寒さと積雪もあり、収穫は職員が行うが、収穫した野菜をきっかけに会話が弾み新たな意欲を引き出すことができた。

2、まんてん菜園開始後、畑の作業以外でもリビングに出て来られ、他のご利用者と話される事が増えた。居室からまんてん菜園を見て、野菜の成長を気にされる場面もあり、普段から畑の世話をしている事で、意欲に繋がったと考える。又、約 2 年間の記録を元に、活動された日をグラフ化する。

（今後の課題・考察・まとめ）

畑の作業を毎日継続する事で、「まんてん」での生活の一部となり、ご利用者が「私の仕事」と思って下さる様になった。作業をする中で、ご利用者同士の関係性も良好になり、コミュニケーションが増えた。今後は、まんてん菜園だけではなく、散歩の時に玄関の花にも水やりをする等、選択肢を増やして行きたい。

（参考・文献など）

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

メディカル向け食材の取扱は九州随一！ HOWDY

株式会社ハウディ

本社：熊本市南区流通団地１丁目８番地　TEL:096-377-2111（担当：特販部　荒木・原田）　対応可能地域：福岡・熊本・佐賀・大分

人手不足対応には、献立付き調理品キット

Simple-Cook シンプルクック

シンプルクック説明動画

一品を利用者様が作ろう

調理を通じて「できる事」を見つけよう

◆キーワード
1 自立支援
2 調理参加
3 機能訓練

（長野県・辰野町）

ふりがな　ぐるーぷほーむだいにぐれいすふるたつの
種別・施設名　グループホーム第２グレイスフル辰野

ふりがな　たなか　きよこ
職種・発表者：田中　清子

共同研究者：　わだあすか　・　いとうりえこ
和田明日華・伊藤利枝子

皆さんが「元気に歳をとる」を意識し、日々の穏やかな生活を大切に、ご自分の出来る事を継続しながら生活して頂いている。	2 ユニット 18 名の事業所、設立は 2006 年で 15 年目を迎える

（取り組んだ課題・はじめに）
　コロナ禍で活動量が減った事により、一部の利用者様に意欲の低下や認知症状の進行傾向がみられるようになっている。施設での生活で多くの時間を費やす食事作りに着目し、その中で個々に出来る事を見つけやりがいをもって、活き活きと生活して頂くため、課題を取り組むこととした。

（倫理的配慮）

発表にあたり利用者様、ご家族から了承を得ている。

（具体的な取り組み）
①現在、調理に参加できていない方の「要因解析」を行い、各居室担当を中心に、利用者様のできること、やりたいことを見つけだす。

②毎日の日課を作り、全員が参加できるように、味見当番表を作成し実行する。

③食事作りの主体は職員ではなく、利用者様である事を認識する。調理の呼びかけや、分担した作業の提供をしていく。

（活動の成果と評価）

①固定の利用者様に参加して頂くのではなく、違う方へも参加して頂けるように声掛けの工夫をすることで利用者様の「できること」を見つける事ができた。一人ひとりのできる事を職員同士で話し合い「包丁は使えなくても野菜を洗う」「皮むきを行う」「細かな作業を工程ごとに分け行なって頂く」という事ができた。歩行が不安定な方にはテーブルで、もやしの芽取りや、しめじなどを裂く調理工程を行なって頂き、指先の運動にも繋げる事ができた。

②味見当番表を作成した事により「利用者様が好む味」の発見、昔の味付け方法などを引き出す事ができ、回想法にも繋がった。味の感想を毎回職員が聞き出し、表に記入していく中で、食材の食べやすさの発見も出来た。

③利用者様が主体である事を認識し、一食調理する際に 3 名以上の利用者様に関わって頂けるように声をかけた。

（今後の課題・考察・まとめ）
　職員の決めつけで利用者様の「できる事、やりたい事」を奪わないよう、失敗例を共有するだけでなく「〇〇を提供したら成功した」など日々の情報共有も行なっていく。グループホーム本来の「利用者様が主体」となるような支援をしていく必要がある。

（参考・文献など）
　なし

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

社会福祉法人　本郷福祉会　グループホームゆすら
福岡県みやま瀬高町本郷2036
TEL：0944-63-2122　FAX：0944-63-2116

外に頻回に出られる方へのアプローチ

Ｓ氏と共に家庭菜園を行っての行動変化

◆キーワード
1 離設を防ごう
2 毎日を楽しく
3 職員の取り組み

（福岡県・久留米市）

にんちしょうたいおうがたきょうどうせいかつかいご　ぐるーぷほーむさくらえん
認知症対応型共同生活介護　グループホームさくら苑

かんりしゃ　ひめのみつこ
職種・発表者：管理者　姫野　光子　　共同研究者：介護職員　長尾　登美枝

当法人は、2003 年 12 月事業を開始。2 ユニット・18 名の認知症対応型共同生活介護事業所。また同法人は 2016 年 11 月 1 日弐番館を設立。	当該事業所は、福岡県久留米市の南側に位置し住宅街の中にあります。

（取り組んだ課題・はじめに）
・ご自宅におられる時は、外に出て行かれ家がわからなくなり帰る事が出来ずに、警察にお世話になっておられたＳ氏。
入居後、1 日 10 回以上庭に出られ庭先の戸の鍵を外し公道に出られる行動が見られていた。
そこで職員より、庭に畑を作ったら、敷地外に出られる行動が減るのではないかとの提案があった。そこで、Ｓ氏と共に家庭菜園をしてみての園芸療法による Ｓ 氏の行動変化を報告する。

.園芸療法とは(野菜作り・ガーデニング)といった自然の中で育てる園芸作業を通じ仲間と協力し植物の世話をする事で五感を刺激し認知症の予防・ADL(日常生活動作能力)・IADL(手段的日常生活動作)・QOL(生活の質)の維持・向上。精神の安定を図る非薬物療法と言われている。

（倫理的配慮）
苑を、Ｓ 氏の家と思い暮らしてほしいという旨をご家族・ご本人に説明し、ご家族からも穏やかに笑顔で過ごしてほしいという希望もあり、家庭菜園を行ってからの行動変化を発表させて頂く事、及び写真使用を快諾して頂いた。

（具体的な取り組み）
苑の外に出る事が出来る戸の付近に畑でない土地を職員２人でスコップ・クワを使い耕し、横 5m縦 1.5mの耕作地に牛糞を入れ、畑を作った。Ｓ氏と職員２人で近くのホームセンターに苗を買いに行き、ナス・トマト・サツマイモ・ゴーヤの苗を 5 本ずつ Ｓ 氏に選んで頂き購入した。手が泥だらけになるも職員と共に野菜を植えられた。
（活動の成果と評価）
　職員と共に朝夕の水やりをし、苗が成長する事を毎日外に出て眺められ楽しまれるようになり、また道行く人と挨拶し話されている姿も見られるようになった。赤く実ったミニトマトを「美味しそうね」と食べられ、ボール一杯に収穫した野菜を調理し食べるのを楽しみにされている。現在も 1 日 10 回以上外に出られているが畑を眺められ、苑の外に出られることは少なくなった。

（今後の課題・考察・まとめ）
　今迄、Ｓ氏はウッドデッキに出られ、そのまま苑外に出ておられたが、畑を作った事により、楽しみができたことや、役割ができたことで、１人で苑外まで出られることが減ったと考えられる。また、野菜の成長や色づきを見ることで五感が刺激され認知症の予防の効果もあるのではないかと考えられる。今回、副産物として、外で野菜の世話をされていることで地域の方との会話の機会を作ることができた。畑作りを通して、ADＬの維持や QOL の向上も期待できると考えられる。また、敷地内での菜園作りは事前準備をすれば他のご利用者の参加も可能であったのではないかと考える。

（さいごに）
今ではミニトマト 20 個以上、ナスも収穫出来ている。Ｓ氏は、ミニトマトを嬉しそうに収穫しながら「新鮮でおいしい」と食べられ職員にも「食べてみておいしいよ」と分けられる様子も見られる。
苑には調理職員がいる為、職員と野菜を洗い・切る・盛り付ける機会もある。ご家庭にいればご自分の手で収穫し調理されていた事だろう。今後も多くのご利用者と菜園作りを続けていきたい。
（参考・文献など）

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

コロナに負けるな家族との絆を守れ

◆キーワード
1 コロナ
2 家族
3 繋がり

コロナ過の中での家族との繋がりから

（熊本県・菊池市）

ふりがな　ぐるーぷほーむ　まゆのさと
種別・施設名　グループホーム　まゆの里

ふりがな　のだ　ゆうすけ
職種・発表者：ホーム長　野田雄介　　共同研究者：おおむらさとみ　いけだなおこ大村里美、池田直子

（今回の発表の施設またはサービスの概況記入欄）	（事業所に関する情報記入欄）
熊本県菊池市泗水町に位置し、同敷地内に介護老人保健施設及び、併設で小規模多機能ホームがある。名称は、医療法人 社団 孔子会　グループホームまゆの里	開設は 2015 年 3 月 23 日 2 ユニット 18 名の事業所 市町村との連携の取り組みや、地域の認知症ケアの質の向上に向けた取り組みなど地域との繋がりを大切にしている。

（取り組んだ課題・はじめに）

現在も、新型コロナウイルス感染の収束の見通しがつかない状況が続いている。当ホームでは、熊本県のリスクレベルに準じて面会を制限している。このような中、新規入居者 K 氏に皮下出血がみられ、これをきっかけにホームに対し不信感をもった事例があった。これはコロナ禍における面会制限が影響し、不安・不満につながった事が要因でないかと考えられた。ホームに対する信頼を回復するために、日々の生活の様子を定期的に伝えることで、家族に安心と信頼を回復できるのではと考え、コロナ過における家族へのまゆの里の取り組を報告する。

（倫理的配慮）

本人・利用者の個人情報とプライバシーの保護に配慮し、本人・家族に説明し同意を得た。

（具体的な取り組み）

【事例紹介】
対象者：K 氏　85 歳　女性　要介護 4
傷病名：アルツハイマー型認知症
入居期間：3 ヶ月
キーパーソン：夫（85 歳）、U 市に住む長女のサポートを受け高齢であるが在宅で介護されていた。
夫は、毎日、面会したいと希望がある。
ADL：食事は自力摂取できる。排泄等は全介助を要する。
身体介護時に介護拒否や大声あり。

【経過、方法】
令和 2 年×月×　日　皮下出血発見、すぐ電話にて謝罪し報告
夫から不安、心配、不信感の言葉がある。
令和 2 年×月　翌日　窓越し面会の希望がある。
1 日どんな風に過ごしているのか説明して欲しいとの希望がある。

①K 氏の毎日の生活状況を写真に撮る。
②職員の手書きのコメントを 1 週間毎に渡す。
③窓越し面会の継続

（活動の成果と評価）

・1 週間毎の記録を渡すと、面会できない寂しさからか長女様からは「あー涙が出るほど嬉しいです」と返答があった。
・ご主人は皮下出血後の面会時、表情が硬かったが、写真や手紙の取り組みを行う中で笑顔も見られるようになり、徐々に職員とも気軽に会話されるようになっていった。

（今後の課題・考察・まとめ）

入居を選択した家族には介護できない罪責感、罪悪感にさいなまれることがある。こうした感情を支援する為に『認知症の人の家族への支援方法』には、「家族への入居サービスにおける情緒的支援で、家族の感情を支援するために、入居中の様子を伝える事や、施設で作成した物を紹介する等、家族とのつながりを意識した働きかけが求められる」と本間昭氏は言っている。入居後、職員は家族と関わる時間は少ないが、家族もサポートの一員であることを念頭に、ケアプラン作成時等、様々なかかわりを持つことがケアの質を向上させると考えなければならない。今回の事例では、1 週間毎の記録を渡し、日頃の様子を伝えたことで、面会制限による不安やケアに対する不信感を解消し、家族への情緒的支援や信頼関係の構築につながったと考えられた。

面会制限の中コロナ過の入居者の家族は自身の感染予防も行い、利用者に会えないストレスに向き合って過ごされていることを感じた。面会制限の中、家族との信頼関係の構築がいかに大切か改めて気づかされた。家族と職員が信頼関係を築き、密に連絡を取り合う事で利用者を支えていく絆のトライアングルを形成することができると感じた。

（参考・文献など）

認知症介護実践者研修標準テキスト（本間昭）P138

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

第22回日本認知症グループホーム全国大会　福岡大会
ご開催おめでとうございます。

日本認知症グループホーム協会　熊本県支部

ケアと医療の協働で
行動・心理症状の改善に取り組む

ケアの工夫と認知症薬の調整

◆キーワード
1 BPSD への対応
2 ケアと医療の連携
3 人生の最終幕

（埼玉県・三郷市）

ふりがな
種別・施設名　グループホームアカシアの家

ふりがな　たけざわ　りえ
職種・発表者：介護福祉士　武澤　理恵　　共同研究者：おおばふみえ、たかすぎはるよ、てらだしん大場文江、高杉春代、寺田慎

認知症対応型共同生活介護 グループホームアカシアの家	1ユニット9名の事業所、設立は平成１５年。認知症の方9 名が共同生活を送る。それぞれにできることを担いつつ、時に協力してできる限り自立した日常生活を送っている。

（取り組んだ課題・はじめに）

駅前にある食堂で長年、仕事をしていた A さん。長女家族と一緒に暮らしていたが、80 歳ごろ混合型認知症を発症し（現在 86 歳女性。要介護２）、小規模多機能を経由してグループホームへ入居。入居して一年経った頃、症状は安定しており内服薬を減量していくことができないか主治医が検討し始めた。しかし、実際に薬の減量を始めると、行動・心理症状（以下 BPSD）が出現し始め、生活が乱れ始めた。夜間に眠れなくなり、居室の荷物やサンダルを廊下へ放り投げる事や、自宅に帰るとスタッフを振り払い外へ出たり、トイレの場所が分からないのか居室内の衣装ケースに排尿してしまったり、他者への暴言までも見られるようになった。また日中帯には今まで出来ていた家事動作や衣類の選択も出来なくなり混乱することが多くなっていた。

症状の原因を探りつつ、関係者会議で医療との連携を図り内服の調整を進め、ホーム側としては本人が安心して眠れる環境の整備と、ケア内容の見直し、工夫を取り組んできた。その経過の中で BPSD が改善し、穏やかな日常を取り戻したと思った矢先、食道がんが発見されてしまった経過について報告する。

（倫理的配慮）

発表にあたり、個人情報の特定ができないよう配慮し、資料・写真は、ご本人やご家族の了承を得た。

（具体的な取り組み）

主治医が認知症薬の減量を始めた時期だった事から、BPSD の原因は薬の変更によるものではないかとスタッフは考えていたが生活面の環境も大きくは変化なかったため、原因がつかみきれずにいた。そこで、スタッフは下記４点について工夫をした。

1. ケア体制を厚くして本人の混乱の原因を探る。
2. 本人自身が混乱を広げないために室内の荷物や洋服を最小限にする。
3. 足浴を実施することで、スタッフとの距離感を縮め信頼関係を構築、安眠効果を狙う。
4. 本人の様子を見るだけでなく、意図的に声を掛ける回数を増やした。

そして、医療との協働の動きとしては、24 時間のきめ細かな観察を情報として適宜報告するとともに、服薬内容の変更や量の調整、頻回な関係者会議を繰り返しながら６か月程度行った結果、原因は睡眠障害と薬の副作用であるということが分かってきた。

（活動の成果と評価）

元々は ADL もほぼ自立していたため、支援する場面がほとんどなく、スタッフが本人と関わる場面は少なかった。しかし、先にあげた 4 つの工夫を取り組むことで、夜間の睡眠状況が改善し始め、身体を休める時間が作れるようになっていった。結果として混乱、暴言などの状況も少なくなり内服も安定した。矢先、嘔吐が始まり食事がとれなくなっていき、検査の結果食道がんが発見されてしまった。しかし、今でも発見前と変わらず、できる家事を担いながら本人の望む生活をしている。

（今後の課題・考察・まとめ）

BPSD の原因は、本人の状態から主治医が薬の度々の調整や症状に合わせた内容の変更がうまくいかなかったことが原因と思われる。改善を目指すために、スタッフの 24 時間のきめ細かな観察と具体的な情報提供、共有のもと医療との協働の成果として 6 カ月程度で本人の状態を安定させることまで辿り着くことができた。今後、がんの進行と共に出来ることが減り、苦痛を感じる時間も増え、BPSD も更に出てくることも予測されるが何が原因で症状が出ているのかを常に考え、ケア内容の見直しや環境面の変更などグループホームだからこそでき、24 時間生活を共にするスタッフだからこそできる、人生の最終幕の支援をしていきたいと考えている。

（参考・文献など）

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

想いを“つなぐ”架け橋に
(株) TASUKIリハビリサービス
〒830-0114 久留米市三潴町福光 292-7
リハビリスポット TASUKI 三潴店
TEL:0942-64-6540／FAX:0942-64-6541
〒830-0103 久留米市三潴町高三潴 288-2
TASUKI リルー訪問看護ステーション
TEL:0942-65-2635／FAX:0942-65-2645
ケアプラン TASUKI 久留米第１
TEL:0942-64-3776／FAX:0942-64-3775

自信を持ち、安心して生活して頂くために

◆キーワード
1 自己否定
2 環境
3 役割と自身

強い自己否定のある利用者様に寄り添う声かけや対応の工夫

長野県・木曽町

ふりがな
種別・施設名　グループホーム　グレイスフル日義（ひよし）

ふりがな
職種・発表者：介護職・永井 真希（ながい まき）　共同研究者：永井 真希、鳥屋窪 陽菜

100 歳に近い方もおられ、持っておられる力をできるだけ発揮して頂けるよう、職員一同毎日奮闘しています。	2 ユニット 18 名の事業所、設立は 2003 年

（取り組んだ課題・はじめに）

昨年度 2 月に入居された要介護 2、83 歳、女性の方が他利用者様との会話の途中などに「私はバカだから。何もできないから。死ねばいいのよ。みんなそう言ってるんでしょ」などの強い自己否定の言葉をおっしゃり、裸足になって歩かれたり、床に座り込まれたりされる行動が見られた。いったんそのような不穏・興奮状態になってしまうと、他利用者様の言葉全てを自分への攻撃として受け取ってしまい、その際に職員が「そんなことはありませんよ。大丈夫ですよ。」とお伝えするもますます興奮され、職員の言葉がけだけで落ち着かれることは無かった。

（倫理的配慮）

周囲の人から離れて静かに過ごす環境・時間を作った。職員も複数で関わるのではなく、特定の職員で対応するようにした。ご本人の気持ちを受け入れ、できることがあるという気持ちを持っていただけるよう、日課となる作業を検討し取り入れた。

（具体的な取り組み）

24 時間シートの記録やカンファレンスにて職員間で日々のご様子を分析した結果、ユニット内で複数の利用者様が活動的になっておられるような際に職員も遠くから大きな声で利用者様のお名前をお呼びしたりして、ユニット全体がざわついているような時に不穏状態になりやすいのではないかとの意見が挙がった。落ち着いておられる時はご自分から「何かやりましょうか」とのお言葉もあり、家事活動等を通して何とか自信を取り戻し、安心して過ごして頂きたいと考え、以下の対応を行なうこととした。

①他利用者様との関係の中で興奮されている時や、ユニット全体が落ち着かない雰囲気である時はその場から離れて頂き、以下の中からできるだけ穏やかな環境を提供する。ユニットを移動して過ごして頂く、居室でお好きな音楽など聞きながらお一人で過ごして頂く、居室で横になって休んで頂く、という対応を時間帯などにより選択する。

②ご本人の言葉をそのまま受け入れる。「私はばかだから」というような自己否定の言葉に対して、すぐ「そんなことはありません」と言葉をかけず、ご本人のつらいお気持ちを受け入れ、しばらく側でお話を聞く。

③ご本人のできる家事活動を提供する。複雑な作業であると、混乱され逆効果であることから、できるだけシンプルな工程のものを提供し、職員がフォローする。

（活動の成果と評価）

①ユニットを移動され、違うユニットの方と過ごされることで環境が変わり落ち着かれることが多かった。夕方などホールの雰囲気が落ち着かれない時間帯はお部屋などでお好きな歌を聴きながら、職員と 1 対 1 でお話しをしたり、床掃除を手伝って頂いた。

②ご本人の側で寄り添い傾聴する中で、表情や声のトーンなど変化を観察しながら職員の言葉かけを行った。ご本人が話を終えたところで「心配でしたね」「大丈夫ですよ」などゆっくりと伝える他、保育士であった生活歴があることから「一緒に歌でも唄いませんか？」と童謡を一緒に唄うと不安な気持ちが緩和している。

③毎日の食器拭きやテーブル拭きを役割として行って頂いている。食器を拭いている時に他利用者様から「そこに片づけるんじゃないよ」などと言われてしまうと混乱され不穏になってしまうため、必ず職員が側に居て片付けを手伝い、「拭く」という動作に集中して頂いている。その他脱衣室の床掃除や玄関の掃き掃除等も職員と 1 対 1 で行っていただいている。どの作業も開始前に気分が落ち込んでいたり、少し不穏状態が始まっていても、作業完了時には落ち着かれ、職員の「ありがとうございました。助かりました」との言葉がけに嬉しそうに笑顔で返されている。

（今後の課題・考察・まとめ）

ご本人が不穏になられる原因としては他に季節の変わり目や便秘なども考えられることから、ご本人の身体状況や取り巻く環境などを多角的に検証し、ひとつひとつに対応していく必要があると同時に職員の声かけの際の声の大きさやトーン、職員の歩き方や動きなどがユニット内の環境に大きな影響を与えていることを認識し、利用者体験等を通して、自分たちのケアを見直していく。また、生活歴から関わり方を検討することも重要である。

（参考・文献など）

施設内研修

第22回日本認知症グループホーム全国大会　協賛企業・団体広告

人、まち、地域を「動かす人」がいる銀行へ　筑邦銀行